

Catwalk



[特集]

芸術監督団が語る“現在地”

まつもと市民・芸術館
Matsumoto Performing Arts Centre

vol.
07
2025
Summer



0歳からお年寄りまで、
みんなのコンサート

『はじめまして!』

レビュー&イラスト 鈴木ともこ
(漫画家・松本市観光アンバサダー)

劇場とは「非日常」の特別な時間が体感できる場所。そこで得たワクワクや喜びを「日常」に持ち帰ることで、生きていく活力がもらえる場所だと思っている。「はじめまして!」コンサートは、それがステージ上からだけでなく、客席中からも満ちあふれていて、私は昨年今年も共に笑って、歌って、気づいたら涙がこぼれていた。

芸術監督団の御三方は、本気だ。本気で「ここはみんなの劇場。みんなが主役」だと伝えようとしている。そう感じたのは、まず開演のアナウンスも暗転も「日常」との区切りもなく、監督団も演者の皆さんもソデから「こんにちわ」と手を振りながら登場したこと。「0歳のお友達はいますか?」「1歳のお友達は?」監督団の呼びかけに、客席のお父さんお母さんが赤ちゃんを抱き上げて応える。「5歳のお友達?」「はいーい!」元気な声があちこちから響く。……もうだめだ、ここで涙腺1回目崩壊。私は年齢性別、肩書や立場を問わず、誰もがその人らしく「のびのび」としている景色がとても好きで、そういう優しい社会であってほしいと願っている。「はじめまして!」コンサートの根底にあるのは、まさに優しさだ。「かつて中学生だった、それ以上のお友達?」茶目っ気たっぷりに笑う石丸さん。今度は大人たちが手を挙げる。腕には入口で配られたサイリウムがピ

カピカ光っていて、私たちもこのコンサートを作り上げる仲間なんだと思える。

私が東京から松本に移住して15年。松本の大きな魅力の1つは「日常とひとつづきに芸術文化が根付いている」ことだと感じている。まつもと市民芸術館はその最たるもの。しかし、劇場に行くハードルがある方、市民でありながらも縁のない方が多いのも事実。「はじめまして!」は、芸術監督団から私達へのあいさつだけではない。観客から劇場へ、プロフェッショナルの生演奏へ、生身の人間が織りなす舞台への「はじめまして」をもたらすもの。

どんな世界も、「最初の一步」のハードルがいちばん高い。でも一歩を踏み出しさえすれば、あとは心の動くまま。

五感を動かし歌にひたり、体を動かし、想像力を広げ、「はじめて」を体感する。会場に広がる自由でのびのびとした一体感がとても心地よかった。最大の涙腺崩壊パートは『ぼよん行進曲』。これは大人にこそ沁みる歌詞。とてもとても大事な「今」を生きてるんだぜ!

終演後、ロビーに出て観客を送り出す監督団。「楽しかったね」「かつこよかった!」と弾む声が聞こえてくる。再びそれぞれの日常へ。

私たちは、大事な「今」を生きてゆく。



2025年7月5日(土) 11:00
まつもと市民芸術館 主ホール
出演：石丸幹二 木ノ下裕一 倉田翠
演奏：クリヤ・マコト (ピアノ)
林周雅 (ヴァイオリン)
里アンナ (奄美大島 島唄・三線)
坂本雅幸 (和太鼓)
林周雅ストリングス
(篠原悠那 堀内優里 小島幸法 鈴木智)

Photo: Nami Maruyama

まつもと市民芸術館では、芸術監督団
団長・木ノ下裕一のもと、アクセシビ
リティについても積極的に取り組んで
います。今回は障害者も参加できる舞
台芸術の企画制作、運営を行っている
一般社団法人日本障害者舞台芸術協働
機構（JDPA）の代表理事、南部充央
と、木ノ下による対談をお届けします。

——お二人の最初の出会いはいは？

南部 2020年の木ノ下歌舞伎「糸
井版 摂州合邦辻」東京公演で、劇場
の方から字幕の依頼があり、うちの字
幕システムを提供させていただいたん
です。

木ノ下 それまで木ノ下歌舞伎では鑑
賞サポートについてほとんど実績がな
かったのですが、2020年に音声ガ
イドや字幕サポートデビューしました。
その後、南部さんと本格的にやり取り
を始めたのは、2023年の「桜姫東
文章」からです。

——木ノ下歌舞伎の作品に字幕をつけ
る作業は、現代口語劇以上に、多くの

補足や工夫が必要だったのでは？

南部 ええ、大変でした（笑）。でも、
だからこそやりたいと思ったのかな。
木ノ下歌舞伎の作品を拝見したとき、
「想像するための余地」が用意されて
いると感じて、僕たちは五感すべてを
使ってそれを体験することができると
れど、テキストだけでそれを伝えよう
とすると非常に難しい。でも、「自分
だったらこんな字幕を作るな、こうし
たいな」という思いが舞台を観ながら
湧き上がってきたので、「桜姫東文
章」や「三人吉三郎初買」（2024
年）で実際に木ノ下さんと試行錯誤で
きたことは、すごく楽しかったです。

——クリエーションを共にして、お互
いにどんな印象を持ちましたか？

木ノ下 南部さんはとても熱い方で、
字幕では伝達が難しいと思われる言
演出も、最後まで諦めずに工夫を重ね
て、伝達できるようにしてしまおう。で
もそれを誇示するのではなく、当事者
の方や作品にとって「必要なことだか
ら」とごく自然にやられるところが、

僕はとっても好きです。もはやクリエ
イティブチームの一員ですね！

南部 木ノ下さんのことは尊敬もして
いるし、勝手に同志だと思っています。
初めて出会った頃、木ノ下さんに「僕
と南部さんがやっていることが似てる
んじゃないかと思う」と言われたこと
があって。「南部さんは今まで障害が
理由で劇場に來られなかった人たちが
劇場に呼び込みたいという志があると
思いますが、僕も木ノ下歌舞伎によつ
て、今まで古典芸能に興味がなかった
人が参加できるように扉を開けたいと
思っている。その点で似てますよ
ね？」と言われたことがあるのですが、
それはすごくうれしかったです。

——その関係性が今年、新たなフェー
ズに入りました。南部さんはまつもと
市民芸術館の鑑賞サポートアドバイザー
をされているんですね？

南部 はい。ほかの地域でも実践して
いる「地域スモールモデル構築事業」
（注：地域の劇場にマッチした方法を
模索しながら、地域と一緒に鑑賞支援

劇場にとってオートクチュールの

アクセシビリティのあり方を探したい

サービスの仕組みを構築するための事
業）の一環として、令和7年度からま
つもと市民芸術館、松本市波田文化セ
ンター、松本市音楽文化ホール3館
でも取り組みを始めました。というて
もこちらから「これをやってください
い」というのではなく、あくまで劇
場スタッフの皆さんがやりたいこと、
やってみたいことを聞きながら、それ
に対する情報提供や懸念事項をお伝え
し、一緒にやり方を模索していくとい
う立場です。

木ノ下 劇場スタッフと南部さんが定
期的に打ち合わせをしながら、各劇場
でどんな鑑賞サポートが実現できそう
かを今、話し合っているところです。
大事なことは、さまざまなトライアル
を経て「継続できること」を探すこと
だと思っています。また私のような鑑賞
サポートに関心のある芸術監督だけが
中心になるのではなく、スタッフが主
体になって「やりましょう！」と取り
組むことが必要だと思います。

南部さんが以前「首都圏で行われて
いる鑑賞サポートは地方の劇場の参考

にはならない」とおっしゃっていたこ
とが、僕はものすごく大事な視点だと
思っています。首都圏に比べて地方の
劇場ではスタッフの人数も予算も圧倒
的に少ないし、地域によって当然必要
なサポートにも違いがある。つまりそ
の劇場に合ったオートクチュールのア
クセシビリティのあり方が絶対に必要
で、それをまずはまつもと市民芸術館
から考え、実装していきたいと思っ
ています。

南部 そうですね。予算やマンパワ
ーの問題で、やりたくてもできないこ
とはそれぞれの劇場で事情があると思
うので、僕は伴走しながらその事情に
応じて何ができるのかと一緒に考えて
きたいなと思っています。ちなみに今、
松本市の3館では各劇場の担当者が福
祉団体を訪問して、劇場での取り組
みを説明したり、実際に当事者にお会
いして、声を聞くという取り組みを始
めています。「劇場になんて行かない
よ」という方も多いかもしれませんが、
実際のユーザーというか、鑑賞者にな
り得る当事者の人たちと会話すること

で、当事者の方たちが劇場に対してど
んな思いを持っているかを知ることが
できれば、それは素晴らしい成果じゃ
ないかと思うんです。こちらの想いを
伝えることも大事だけれど、話を聞く
こともすごく大事だと思います。

木ノ下 確かにそうですね。その訪問
は、僕も一緒に行ってみたいな！今、
鑑賞サポートは注目を集めている分野
でもあり、字幕サポートや手話通訳を
謳った公演が増えていますが、この機
運が今後も継続するかどうかは疑わし
いなと思っています。でも絶対に続けな
いといけない。作り手にとっても、鑑
賞サポートについて考えることはとて
も大切だと思うんです。「この作品を
聞こえない方はどう見るのか、見えな
い方はどう聞くのか」という視点で振
り返ることで、作品そのものがさらに
強度を増しますから。

南部 確かにそうですね。舞台って相
手がいるから成り立つものだと思うの
で、「誰に届けたいか」を改めて考え
ることは、とても大切なんじゃないか
と思います。

南部充央

2001年より国際障害者交流センターの事業にか
かわる。以降、障害者も参加できる舞台芸術の
企画制作、運営、アドバイザー、研修に携わる。
日本障害者舞台芸術協働機構代表理事。全国公
立文化施設協会コーディネーター。著書に「障
害者の舞台芸術鑑賞サービス入門 -人と社会を
デザインでつなぐ-」（2019/NTT出版）がある。

木ノ下裕一

芸術監督 倉田翠セレクト

いまここに 山田せつ子 ダンスソロ

ノックする。ノックするというより、触る。こちょこちょ触る。ドアノブをいじる、でも回さない。誰もいない。いるのかいないのかわからない。まず顔を隠す。自分がいなくなる。逃げも隠れもできないのに、誰もいないかのように踊る。大きな手が満足げにわらっている。しかしやはり逃げも隠れもできないのだ、この体からは。それを見ている人たちの目からは。

笠井勲に師事し、最初の1年間は週3回の稽古を一度も休まずに、しかしまったく踊れずにひとり片隅で座っていたダンサーの出自は、その体にはっきりと刻み込まれている。手が、足が、動かそうとすればするほど遠くに行ってしまうような感覚。体に閉じ込められているのに、私は体のことを知らない。わからない。しかし山田はそこからさらに〈私〉を差し引いていく。私が知らないのではない。指は足の甲を知らない。膝は脇腹を知らない。顔は股を知らない。それらを互いに出会わせる。ただ出会わせるためだけに出会わせる。そうして知らないことの範囲が、小さく、徐々に広がっていく。土踏まらずは床を知らない。首は照明を知らない。爪はこの絵を知らない。出会わせつづけることで、かつて「生きていることの痛み」に撃たれたダンサーの体が、つかのま癒やされ、放りだされていく。

そもそも知らないことのほうが多いはずなのだ。知っていると思っていることのなかにも、かならず知らない部分がある。映像でクローズアップされる銅版画を見る。ある形態に見えたものは無数のストロークの集合であり、さらにそこでも激しく地と図が入れ替わる。ゾートロープのように、動く、動かす、動かされている——〈私〉を差し引いた知覚のなかでそれらはもはや溶け合い、知らないことがただ体に流れ込んでくる。踊っていれば蓄積するはずの語彙から遠く逃げて、探しに行く。どこかに忘れてきた何かを。

閉じつつ拡散する動きの環からこぼれ落ちたものたちが、気づけばそこらじゅうに散らばっている。それらはたとえば、たっぷりしたワンピースが膝にまわりつく感触、空気をくすぐる指先に感じるかすかな抵抗を通して、そっとこちらに手渡される。知らないことのなかには少しだけ知っていることがある。革の靴を裸足でなく感覚を、私の足の裏に感じる。その一瞬のために、きっとこの踊りは踊られている。

白尾芽（ダンス研究／編集者）

photo : Takeshi Hirabayashi

REVIEW

芸術監督 倉田翠セレクト
山田せつ子ダンスソロ
『いまここにいます』
2025年7月10日(木) 19:00
2025年7月11日(金) 14:00
まつもと市民芸術館 小ホール
構成・ダンス：山田せつ子
美術：尾関立子
映像：添田康平

お互いのこと、松本のこと、劇場のこと…
芸術監督団が語る“現在地”

木ノ下裕一 × 倉田翠 × 石丸幹二

芸術監督団始動から1年半。記者会見など、3人がそろう場面で
常に和やかなやり取りを繰り返している木ノ下裕一、倉田翠、石丸幹二に、お互いに対する印象や
2025年度のテーマ「飛び出す」に込めた思いなどを聞きました。

——芸術監督団が始動して1年半。皆さんの
仲の良さは3月に行われたラインアップ発表
の様子などからも伝わってきますが、それぞ
れお互いに対してどんな印象を持っているの
でしょうか？

倉田 私たちはやっていることも価値観も違
いますが、お互いを否定しない関係性がすこ
くいいなと思っています。三人の中では、木
ノ下さんは正確な知識に基づくまとめ役、石
丸さんは夢を語る人、私は「抜け担当」
(笑)。自分のカンパニーでは普段、主宰とし
てちゃんと話さないといけないことが多いで
すが、ここではいい意味で肩の力が抜けてい

るというか、感覚的な部分を出させてもらっ
ているのかなと思います。

石丸 顔を見るとわかると思うんですが、お
二人とも穏やかなんです。また三人の共通点
として、ポジティブに物を捉えるのが好きだ
ということ、お互いをリスベクトしたうえで
発言できること、がこのチームの良さだなと
思います。翠ちゃんが僕を「夢を語る人」と
紹介してくれましたが(笑)、例えばちょっと
と実現が難しいようなことを僕が提案しても、
二人とも否定せず温かく受け入れてくれる。
そういったところは非常にうれしいですね。
木ノ下 お互いに対する見解がそれぞれ違う
のが面白いですね(笑)。僕からすると倉田
さんは切り込み隊長、石丸さんは芸術監督団
の重心かなと思っています。畑に例えると、
どんどん進んでいく倉田さん、重心を取って
くださる石丸さん、僕はその後をついて行っ
て、残った石を拾ったり、空気がうまく入り
込んでいないところに手を入れて空気を入れ
るために掘り返したりと、三人で土壌を耕し
ている感じがします。

——昨年、第1弾、今年7月に第2弾が開催
されたコンサート「はじめまして！」では、
「芸術監督団お披露目公演」として、皆さん
が出演者として同じステージに立ちました。
一緒に舞台に立つて感じたことは？

倉田 「はじめまして！」の企画者は石丸さ

んで、石丸さんを中心に進んで行きました。座長としての石丸さんは、キャストやスタッフなど全ての人和やかに対応されていて、気配りの人だなと。本当にすごいなと思いました。

木ノ下 石丸さんは舞台上でも自然体で普段通り。とてもおだやかで、これはすごいことだなあと思いました。倉田さんは学生の頃から知っていますが、あの倉田さんが、子供たちと接したり、童謡で踊ったりするなんて！（笑）新しい顔を発見しました。

石丸 音楽の現場では、リハーサルが1日だけで本番をやるのがよくありますが、木ノ下さんと倉田さんには過酷なことをお願いしてしまっただけかもしれません。ただ、お二人もほかのアーティストたちも非常に楽しんでくれたよううれしかったですし、その楽しさは客席にもそのまま伝わるので、劇場に一つの輪ができた感覚がありました。翠ちゃんが即興で踊ったり（笑）、木ノ下さんが語りで皆さんを和ませたり、本当に僕たちの名刺代わりの公演になったと思います。

——この1年は、芸術監督団の皆さんを松本の方たちに「知ってもらおう」と同時に、皆さんが松本を知っていく時間だったかなと思います。松本の街や人に対して、今どのような



ちをよくお連れします。味が毎日変わったり、ロボットが作ってくれたり、連れていくとみんな喜んでくれるんです（笑）。

石丸 松本ってセレクトショップが多いんですよ。東京ではなかなか手に入らなかったようなものが買えたりするので、よく行きますね。

木ノ下 僕は本屋さん。大型書店も個人の本屋さんも古本屋さんもあり、大小問わず書店がちゃんと生きてるってすごいことだなと思います。松本に來ると、思わずたくさん本を買ってしまいます。

——松本時間を満喫されていますね！2025年度は「飛び出す」を主題に、多様な事業が企画されています。「飛び出す」というテーマについて、皆さんが思うイメージを教えてください。



な印象を持っていますか？

木ノ下 まず皆さん、文化への関心が高く、フレンドリーで素晴らしいと思います。と同時に、人間関係が濃密で、例えば高校時代の同級生だったり親戚だったりという人たちが身近にいらつしやるので、そんな緊密な人間関係の中によそ者の僕たちが入っていくことは大変だなと思う部分もあります。ただ、僕は和歌山、倉田さんは三重、石丸さんは愛媛と、三人とも首都圏で生まれたわけではないので、地方に対する感覚が高いと言いますか、よそから来た人に対して「確かにそういう対応になるよな」と思う部分もあり、そういった共通体験があることも、僕たちがうまくいっている理由の一つだと思います。

倉田 私はこれまでも、丸の内でも働くワーカ―や薬物依存症のリハビリ施設、現在は松本少年刑務所などといった、ダンスと直接関係ない場に「飛び込みがち」なのですが、今回もこちらから会いに行く意識で、どのように観てもらうのか、どういう人と一緒に踊るのかといったことを考えていきたいと思っています。大きなことを掲げて動くというより、地元のコミュニティに参加するとか、身近なところから「飛び出す」が実現できたらと思います。

石丸 僕は二つの柱があると思っています……。一つは、劇場が改修工事ですばらく休館することが決まっております、次の「はじめまして！」はまともと市民芸術館ではできないので、関連施設と連携することになっています。そのようにして芸術館発の作品を継続できたらと思っています。もう一つは、「はじめまして！」をさらに細分化してパッケージ化することで、キャラバン企画で訪ねたような場所に、もっと少人数のチームで行くことができたなら、それが飛び出すになっていくんじゃないかなと思っています。

木ノ下 芸術監督就任以来、「ひらいていく劇場」というスローガンの元で活動してきましたが、その解釈が受け取る人によってだいぶ異なるなと感じています。芸術監督団としては、「ひらく」に「開く（オープンであること）、拓く（新しい領域に足を踏み入れること）、易く（難解に見えることをわかりや

倉田 私は就任するまで松本についてあまり知らなかったのですが、前情報として文化に関心が高い人たちが多い場所だと聞いていて、確かにその通りだなと感じました。ただ、私は三重の出身で、身近にコンテンポラリーダンスをやっている人が本場に少なかったんですけど、松本もその状況は似ているところがあると思います。知らないものに対して抵抗を感じるのは当たり前ですから、まずは知ってもらうことが大事だと思います。キャラバン企画（注：芸術監督団が揃って松本市内のさまざまな場所を巡るプロジェクト。詳細は4・5ページ）で松本市内をあちこち巡りながら、ダンスのことも知ってもらえたらと思っています。

石丸 キャラバン企画で回っていると、前芸術監督の串田和美さんが本場に松本のあちこちに出向かれて、20年かけて時かれてきたものから「芽」が育っていることを感じます。その芽に対して、僕たちはやっぱり何かをしなくちゃいけないと思います。と同時に松本って本場に広くて、それぞれの地域に文化があるので、僕らが橋をかけていけないかなと考えてもいます。

——街の印象はいかがですか。松本のお気に入りは見つかりましたか？

倉田 老舗和菓子屋さんの開運堂さんのソフトクリームは、ゲストで来てくださった方た

すくすること、啓く（教え導くこと）、披く（初めて披露すること）と、五つの意味を込めています。今年度は「私たちの『ひらく』はこれです！」ということをより具体的な形にしていきつつ、飛び出していけたらなと。もう一つは、私たちが劇場を飛び出していき、市民の方たちに「自分たちのもとに来てくれた」と感じていただくことも大事ですが、劇場の役割を広く知っていただくことも大事なのではないかなと思っています。人によっては一生行かない場所かもしれないけれど、劇場は単に娯楽施設というだけでなく、誰かにとっては生きていくうえで絶対に必要な場所なんだ、ということをぜひ多くの方に感じていただけたらと思っています。



KANJI ISHIMARU × MIDORI KURATA × YUICHI KINOSHITA

INTERVIEW

まつもと市民芸術館プロデュース

『チェーホフを待ちながら』

「チェーホフを待ちながら」が、このたび、まつもと市民芸術館のプロデュースにより松本と神奈川で上演されます。本作は、土田英生を軸とするMONOが2003年に初演、2009年に再演した作品で、チェーホフのヴォードビル4作品「熊」「煙草の害について」「結婚申込」「余儀なく悲劇役者」をベースにしたオリジナル作品となっています。7月上旬、2025年版の上演に向けて準備中の土田に、作品への思いを聞きました。



土田英生

愛知県出身。劇作・演出家、俳優。MONO代表。1989年にB級ブラクティス（現MONO）結成。1999年第6回OMS戯曲賞大賞、2001年第56回芸術最優秀賞、2021年第76回文化庁芸術祭大賞を受賞。テレビドラマや映画脚本の執筆も多数。

——本作は2003年に「チェーホフは笑いを教えてくれる」のタイトルで初演されました。チェーホフには以前から興味があったのですか？

日常をベースに少し歪んだ世界を描く作家は割とチェーホフを通ると思うのですが、僕の場合はそんなに熱く語れるほどチェーホフにはハマらなかつたんです。ただあるとき1幕ものを読んで、チェーホフがこんなコントみたいな戯曲を書いているのか！と衝撃を受け、企画につながりました。

——2009年の再演ではどのくらい変わったのでしょうか？

大きく違ったのは、2003年は女性の俳優二人を含む五人だったのですが、2009年は男性五人で演じることになったことです。ただ戯曲はあま

り変えておらず、演出面で戯画化する

ように意識しました。あと「チェーホフを待ちながら」に改題して、「チェーホフを待っている人たちが」がコントに興じる、という構造を強めました。

——「待っている人たち」が他愛無い会話を繰り返る様は、「ゴドーを待ちながら」のようでもあります。別役美さんの「五人の紳士」シリーズにも通じるような気がします。

もともと不条理ものやナンセンスものが好きで、別役さんもモンティ・パイソンも好きでした。ただ当時自分がやる芝居は、具象化された舞台美術の中で集団の会話を描くことがメインになっていた。意外と不条理ものも好きなんだよね」という気持ちで「チェーホフ」を書くときにはあったよ

うな気がします。

——今回、16年ぶりに上演することになったのはなぜですか？

数年前からまつもと市民芸術館で「台本づくり講座」をやらせていただいている、プロデューサーの小川さんとお話する中でこの作品の名前があがったんです。僕としては正直なところ「あんな地味な作品でいいんですか？」と言ってしまったくらいなんですけれど（笑）、それでもいいならぜひ、と。今戯曲に手を入れているところなのですが、「ゴドーを待ちながら」でいうところの「（ゴドーさんは来れない）」と告げる「少年」役を入れたと思っています。それと4つの物語の「つなぎ」をどうするか。今回達者な俳優さんが揃っているの

もうちょっととシンプルに作りたいな
と思っています。

——土田さんの発言には「ゴドーを待ちながら」がよく出てくる印象があります。「ゴドー」をやってみたいというお気持ちは？

いやいや、「ゴドー」を演出する自信はないです。ただ……たとえば何もない日に誰からLINEが来たら、自然と「何かいい話なんじゃないか」と思いながらLINEを確認するって事は誰しもあると思うんです。人って常にぼんやりと期待し続けている気が

上で大事なんじゃないかと思っています。

——笑いに長けた出演者が揃いました。それぞれに期待するところは？

山内圭哉さんは実はこれまで一緒にやったことがなかったので、今回満を持してと言いますか。彼はとにかく上手いですが、楽しみです。千葉雅子さんは、もう長年連れ添った人という感じ（笑）。ただ僕、千葉さんのあの面白さがどこからきているのか、いまだにわからないんです。今回もその面白さを発揮してもらいたいなと。

新谷真弓さんとみのすけさんは、ナイロン100℃で不条理な笑いをずっとやってきている方たち。彼らとこの作品をやってみたいという気持ちはすごくありましたね。武居卓さんは松本を拠点に活動されている方で、今回初めて一緒にします。これはこの企画自体にも関係してくるかもしれませんが、新たな作品を作るうえで、地方の公共劇場は最後の砦になってきていると思うんです。今作のように、松本で滞在制作して別の場所でも公演するという企画はとても重要だと思いますし、そのときに地域に根を張って俳優活動やスタッフワークを続けている人たちと一緒に作品を作ることこそ、ごく大事

だと思っています。

——MONOからは唯一、金替康博さんが出演されます。

彼がやる「結婚申込」が面白いんですよ、ハマリ役というか。それで今回も「結婚申込」は金替くんによってもらいたいと思っています。

——チェーホフというと「桜の園」「三人姉妹」など長編の印象が強いですが、改めて1幕ものの魅力について教えてください。

チェーホフは喜劇だと言いますが、こういう喜劇性かという、僕は徹底的に主観と主観がぶつかり合うところや、他者への無理解の部分だと思えます。例えば僕も自分の台本の中でよく書きますけど「お金を貸した」「いや借りてない」、みたいな言い合っていて、アップで見ると笑えるんですけど、引いてみると「なんで人って分かって合えないんだろ」というある種の諦念や虚無感が漂ってくる。つまりヴォードヴィルの面白さが「ワーニャ伯父さん」や「三人姉妹」の面白さにつながっていくのだと僕は思うので、作品を通じてそのことを皆さんにお伝えできたらと思っています。



チェーホフは笑いを教えてくれる 2003

Photo: Ai Hirano



チェーホフを待ちながら 2009

Photo: Masahiko Yako

発売中

東京フィルの「午後のコンサート」 in Matsumoto

11月22日(土) 15:00

キッセイ文化ホール・大ホール

指揮とお話：円光寺雅彦

語り：石丸幹二

演奏：東京フィルハーモニー交響楽団

料金：全席指定(税込)

一般 ¥4,000/U25 ¥2,000

※未就学児入場不可

※U25(25歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、

また当日年齢確認をご提示ください。



©K.Miura

©HIRO KIMURA

『Catwalk／ねこあるき』Vol.7

2025年9月12日発行

発行 まつもと市民芸術館

〒390-0815

長野県松本市深志3丁目10番1号

Tel 0263-33-3800 Fax 0263-33-3830

E-mail mpac@mpac.jp

URL <https://www.mpac.jp>

デザイン 清水貴栄・小林慎太郎

印刷 藤原印刷株式会社

※禁断転載

■郵送サービス

『Catwalk／ねこあるき』の郵送をご希望の方は、
郵送費用分の切手(1号180円)を下記へお送りい
ただければ送付いたします。その際、お名前・ご
住所・何号をご希望かを必ずご明記ください。

〒390-0815 長野県松本市深志3丁目10番1号
まつもと市民芸術館 広報誌担当 宛

『Catwalk／ねこあるき』は、まつもと市民芸術
館のほか、市内公共施設、市内飲食店、全国の
劇場施設などに置いてあります。

■チケット購入・お問い合わせ

【まつもと市民芸術館チケットセンターのご案内】

①電話 0263-33-2200(10:00-18:00)

②インターネット <https://www.mpac.jp>

(要事前会員登録・無料)

③窓口 芸術館1階(10:00-18:00)

【芸術館チケットクラブのご案内】

※まつもと市民芸術館ホームページよりご登録ください。

※インターネット予約が可能(一部公演をのぞく)。

※メールマガジンにて最新のチケット情報や公演案内を配信。

■アクセス

【バス】JR松本駅お城口(東口)より、
駅前バスターミナルから「市民芸術館前」下車

【徒歩】JR松本駅お城口(東口)から
「あがたの森通り」を東へ800m、徒歩10分

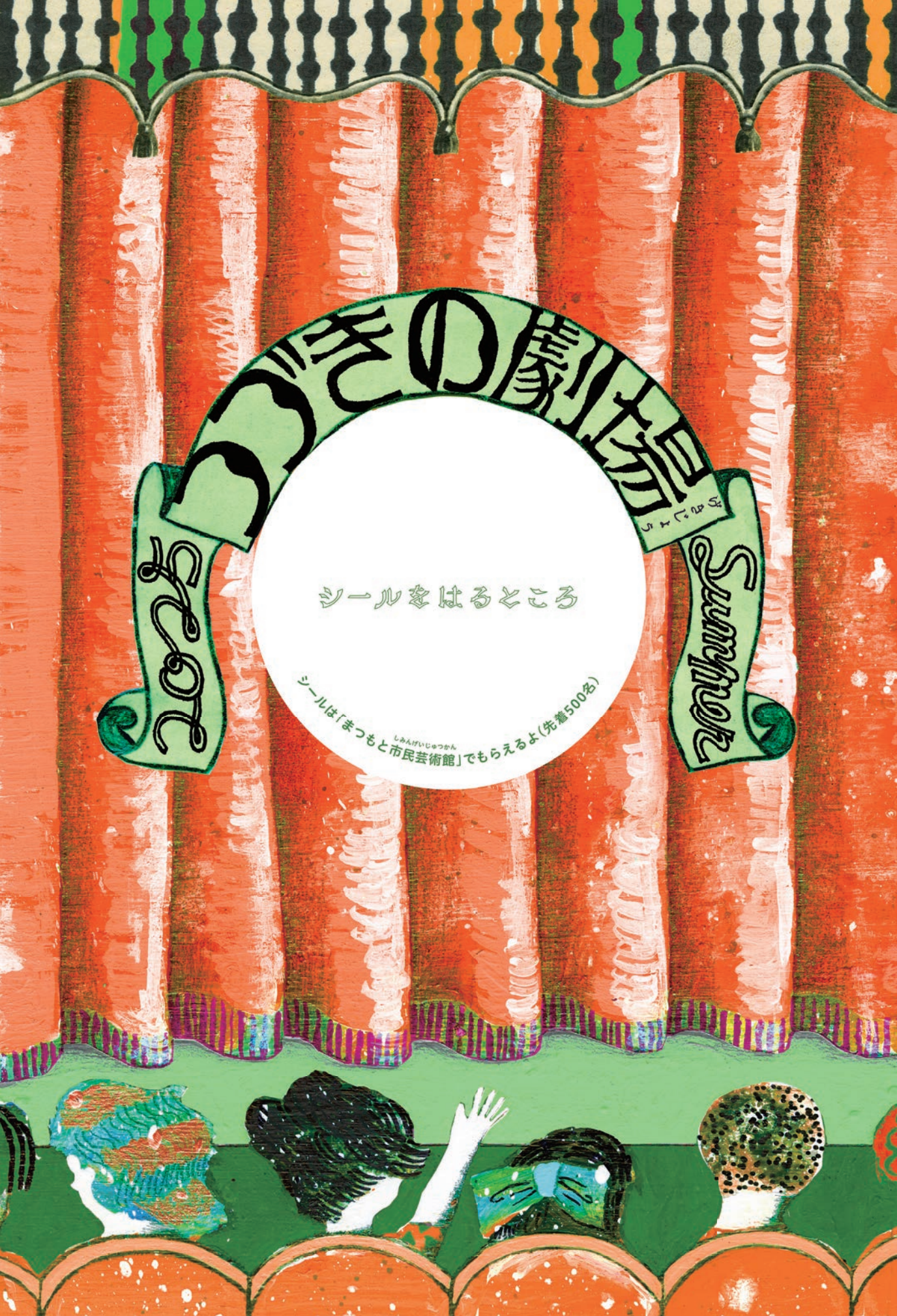
※駐車場の用意はございません。

公共交通機関や有料駐車場をご利用ください。

※近隣商業施設等への無断駐車は

他のお客様のご迷惑になりますのでご遠慮ください。

『Catwalk／ねこあるき』は、まつもと市民芸術館の
広報誌です。『Catwalk』は芸術館の情報、『ねこある
き』は街の情報を中心に紹介し、両側から読めるよ
うになっています。またCatwalk(=キャットウォーク)とは、劇場のステージや客席の上のスタッフし
か歩くことのない細い回廊のことを言います。



シールをはるところ

シールは「まつもと市民芸術館」でもらえるよ(先着500名)



ここは「^{げきじょう}つづきの劇場」です。^{やくしや}役者たちに ^{いろ}色と セリフが まだ ついていません。

^{つづき}続きを ^{げき}かいて ^{がくせい}劇を ^{がくせい}完成させてください。完成できたら ^{きん}金メダルシールを もらえます。





さくノザ"キャビンカンパニー
と

きみのなまえ

発売中

2025年劇団☆新感線45周年興行・秋冬公演
チャンピオンまつり いのうえ歌舞伎

『爆烈忠臣蔵〜桜吹雪 THUNDERSTRUCK』

9月19日(金) 16:00/20日(土) 11:30、17:30

21日(日) 11:30/23日(火・祝) 11:30、17:30

主ホール

※22日(月) 休演日

作: 中島かずき

演出: いのうえひでのり

出演:

古田新太 橋本じゅん 高田聖子 栗根まこと

羽野晶紀 橋本さとし

小池栄子/早乙女太一/

向井 理 ほか

料金: 全席指定 (税込)

S席 ¥15,000/A席 ¥12,000

※未就学児入場不可



発売中

『ヨナ -Jonah』

10月25日(土) 14:00、26日(日) 14:00

小ホール

原作: マリン・ソレスク

翻訳・修辞: ドリアン助川

演出: シルヴィウ・ブルカレーテ

舞台美術・照明・衣裳: ドラゴッシュ・プハジャール

音楽: ヴァシル・シリー

出演: 佐々木蔵之介

料金: 全席指定 (税込)

一般 ¥5,500/U25 ¥2,000

※未就学児入場不可

※U25 (25歳以下) チケットは

枚数限定・前売のみ、

また当日年齢確認を

ご提示ください。



発売中

まつもと市民芸術館プロデュース

『チェーホフを待ちながら』

原作: アントン・チェーホフ

脚本・演出: 土田英生

出演: 山内圭哉 千葉雅子 金替康博

新谷真弓 武居 卓 みのすけ

松本公演

11月6日(木) 19:00/7日(金) 14:00/

8日(土) 13:00、18:00/9日(日) 13:00

小ホール

料金: 全席指定 (税込)

一般 ¥4,500/U25 ¥2,000/障がい者割引 ¥4,000

※未就学児入場不可

※U25 (25歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、

また当日年齢確認をご提示ください。

《障がい者割引の注意事項》

*公演当日、障害者手帳をご提示ください。*移動に介助が必要

な方には、介助者1名につき一般料金の50%を割引いたします。

*まつもと市民芸術館チケットセンター (窓口・TEL) に

てご購入ください。ネット予約不可。

* 8日(土) 13:00 視覚サポートあり

* 9日(日) 13:00 聴覚サポートあり

神奈川公演

11月12日(水) 19:00/13日(木) 14:00/

14日(金) 14:00/15日(土) 14:00/

16日(日) 13:00

KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

料金: 全席指定 (税込)

一般 ¥6,000/U24 ¥3,000

※未就学児入場不可

※U24 (24歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、

また当日年齢確認をご提示ください。



それでも、猫が好き。

小島 有



猫にだって、アガらない日あるよね。そんな時は、早く寝よう。そしたら、もう大丈夫です。
9月2日～30日まで、RAULA Coffee and Moreにて「小島有のネコとの話し方（野良ネコ編）」という展示が始まります。ぜひ遊びにいらしてください。



「つづきの劇場」 ぬり絵作品展開催！！



4月12日上演の『オバケッタ』関連企画として、本誌「つづきの劇場」のぬり絵作品展を開催しました。「つづきの劇場」の作者である美術家・絵本作家のザ・キャビンカンパニーさんが『オバケッタ』の舞台美術を手掛けられたところから生まれた企画です。
実験劇場の入り口付近に今までに寄せられた力作をずらりと展示。vol.1から5まで、多くの素敵な作品を掲示することができました。
公演当日は vol.6 のぬり絵体験コーナーも設置。『オバケッタ』の主人公、ゆめた君とリュウのぬり絵に、お子様から大人の方まで、大勢のお客様が熱心に取り組み、金メダルシールを手になされていました。
時間の都合で当日の作品はコピーできせんでしたが、多くのお客様が公演とともにぬり絵を楽しんでくださいました。
ぬり絵と金メダルシールプレゼントの企画は今年度も継続します。皆様の作品、お待ちしております！



芸術館ゆかりのアーティストが選んだ

松本うまいもん

松本に行くようになって15年ぐらい、ずっと通って
ます。駅から芸術館に行く途中にあるので、電飾看板
が営業中になっていると寄ってしまいますね。山田う
んさんに教えてもらったのが最初だと思うのですが、
芸術館のポスターが張ってあったり、チラシも置いて
あるので、お店のご主人と「僕、この公演出るんですよ」
などとお話するのも楽しいです。パンを作っているス
ペースが広くて、飾らない職人
的な雰囲気が好きなんです。惣
菜系も、甘い系もどれも食べ応
えがあり好みですが、いつも有
るかなーと期待して探してしま
うのは、強いていえばチーズや
クランベリーのパンかな？



川合ロン（ダンサー）

早稲田大学卒。日本を拠点として、山田うん、北村明子、小野寺
修二、鈴木ユキオ、インバル・ピント、ウィル・タケット、近藤
良平、エラ・ホチルド、森山未来などの作品にダンサー・俳優と
して出演。12月には恒例となっているダンスワークショップ「と
りあえずやってみよう」の講師として来松予定。



ポンヌフのパン

ポンヌフ

長野県松本市深志3丁目7-6
【営業時間】8:00～16:00
【定休日】水曜日



松本の七夕



松本の夏の風物詩といえば、七夕人形。
松本地域では、七夕行事は月遅れの8月7日におこ
なわれます。一般的な笹飾りのほかに、牽牛・織女
を模した男女の紙製や木製の人形に、子どもの着物
や浴衣などを掛けた七夕人形を縁側に飾り、ほうと
うや夏野菜を供える風習が江戸時代頃から続いてい
ます。この七夕人形は、雛祭りや端午の節句の飾り
と同じく、子どもの健やかな成長を願って贈られる
ことが多かったそうです。着物を掛けるのは、虫干
しを兼ねたものとも、子どもが着るものに不自由し
ないためともいわれます。
「七夕ほうとう」は、小麦粉で作った太い麺に小
豆あんやきなこを和えたもので、松本地域ではこの
時だけの特別な料理として食べられています。
夏になると松本市内のお店などに七夕人形が飾ら
れますが、まつもと市民芸術館でも松本おかみさん
会の皆さんによって七夕人形が飾られています。



平成元年のリフォーム前、昭和の菊の湯の姿。右手に見える縦型の「天下の名湯 ゆ 菊の湯」の看板は、現在も使われている。



〔 菊の湯編 〕

松本に暮らす人々にかつての街の風景について取材をし、創作した演劇作品「まつもと、景の声」は、2025年2月、まつもと市民芸術館2階のオープンスペースで上演されました。「まつもと、景の声」の構成・演出を担当した藤原佳奈が、その派生企画として、松本の今と昔の風景について綴っていきます。

芸術館からあがたの森通りを挟んで斜め向かいにある、白い建物。真っ赤な「ゆ」の文字が目立つ。松本市民にとってはお馴染みの銭湯「菊の湯」だ。一度閉業の話が持ち上がったが、向かいのブックカフェ某日が事業継承することになり、2020年にリニューアルオープンをした。

「菊の湯」の創業は100年ほど前に遡る。3代目の宮坂賢吾さんが伝え聞いた話によると、「菊の湯」の前身は材木屋さん。残り木を炊いてお湯を沸かし、職人さん達がお風呂に入れるようにしたところ、そのお風呂に入りたいという人がどんどん増えていった。「こんなに入りたい人がいるなら、もっと大きなお風呂を作ろう」ということで、だんだんと銭湯になっていったらしい。

現在の近代的な「菊の湯」の建物は、平成元年のリフォーム後の姿だ。昭和の頃は瓦屋根のある風格ある建物で、現在の駐車場となっている場所には庭があり、池もあったという。あがたの森側に掲げられている縦型の「天下の名湯 ゆ 菊の湯」と書かれた看板は昭和の頃からそのまま引き継がれている。

宮坂さんが生まれた昭和40年は、内風呂がない時代で、家族みんなで銭湯へ通った。銭湯の中は座るところがないくらいの芋洗い状態で、子供たちも沢山いて、泳いでは怒られ、蛇口をひねって水でお湯を薄めすぎでは怒られ、賑やかな光景が日常だったという。その頃、町の中にある銭湯は40以上。当時の燃料はおがくずや薪だったので、銭湯には必ず大きな煙突がついていた。そこにある目印のように、町の中には銭湯の数ぶんの煙突が立つ風景が広がっていたのだろう。

あがたの森通りと言え、松本駅から浅間へ向かう路面電車が走っていた通りである。浅間線は1964年に廃線となったので、宮坂さんが生まれた1965年にはすでに路面電車の姿はなかったというが、少しその風景を想像してみる。通りの真ん中を走るチンチン電車の姿と、洗いざらしの髪をなびかせながら、あるいは、風呂に入る楽しみに浮き足立ちながら、電車の真横を行き交う家族の姿を。



綴る「まつもと、景の声」

藤原佳奈 戯曲作家・演出家。わたしたちの〈はたらき〉を聴き、上演の場をひらく。2020年より長野県松本市在住。2024年秋より、劇場実践の場「松のにわ」を始動。毎月最終水曜日出居番丸西で「米はある！」を主催。多分野で協働しながら、身体へのまなざしを分析し、再編を試みる「アートプロジェクトひとひと」を進行中。

まつもと暮らし

松本に移住された方を紹介する新たな企画がスタート！

第1回目はStep Mの育成者でもある櫻井拓斗さん。移住が必須条件ではないプロジェクトでなぜ松本に住むことに決めたのか、普段はどのように過ごしているのかを聞きました。



OMIYA SHRINE

4月大宮神社例大祭に担ぎ手として参加させていただきました！活気のある松本の営みに出会いました！



移住のきっかけになった松本市の魅力

松本にはじめて訪れたのは小学生の頃で、地元の群馬県と近かったこともあり当時は年に一度程度家族で観劇に訪れていました。大学で地元を離れてしまいましたが、昨年の冬久しぶりに松本市を訪れた際、街にしみ出る音楽や劇場文化、山や湧き水などの自然に改めて気付かされ自身の創作環境にとってもあっている場所だと思い移住したいと思いました。

移住後移住前での松本市の印象の変化

移住前松本には「伝統的な文化と歴史の街」という大まかな印象を持っていました。実際に足を運び暮らし始めてみると、伝統文化だけでなく、地域の方々が行っている新しい文化やコミュニティの存在にも気づかされました。なかでも印象的だったのは、島内地区で月に一度子ども食堂などを開いている「愛ランド島内」さんとの出会いです。地域の方々为主体的に取り組むその姿から、移住前には見えていなかった松本の新たな文化の未来を感じるように

櫻井拓斗 2002年生まれ、コンテンポラリーダンスの振付、演出などを行っています。今年4月にまつもと市民芸術館「Step into the world from Matsumoto」にダンス作家として採択いただいたことをきっかけに、兵庫県豊岡市から移住してきました。



TOYA PEAK

5月に戸谷峰にのぼり、そこで見た松本の景色に感動。山脈の力強さと、それに負けない町の存在感！



MATSUMOTO CASTLE

松本城の桜景色。春の松本の景色も風情があり、暮らしの始まりを感じさせてくれました！

なりました。個人で営まれている喫茶店や書店、食堂、レコードショップ、バーが多いのも魅力です！

松本でのくらしの魅力

休みの日にはお店巡りや登山、観劇などを行って、松本を満喫しています！春先にお祭りに参加させていただいたのも良い思い出です。はじめて地域の活動に参加するのでとても緊張していましたが皆さんが温かく迎え入れてくれて、一緒に伝統ある地区のお神輿を担がせていただきました。日々の生活の中でも、信号のない横断歩道で車が止まってくれたり、松本の思いやり精神を感じています！

これから松本でやりたいこと

松本で出会った人や、これから出会う人たちにダンスに触れてもらえる機会を作ってゆきたいと思っています。コンテンポラリーダンスがどの様にして松本に繋がることができるか私はまだ具体的には見えていませんが、ここで暮らしながらダンスで松本を盛り上げたいです！

富士の湯

松本市で長く親しまれてきた「富士の湯」4代目、アベノリミツさんは学生時代はバンドマンとして活躍、5年前にお父様と共に経営に携わるようになり、今は東京と松本を行ったり来たりしながら、銭湯経営の知識を日々吸収中です。「全国で学んだアイデアに地域性を持たせ、どう松本に合う形につくり上げるかを意識しています。」



この日は取材の後、ライブ参加と大忙しのアベさん

“富士の湯の売り”は、松本の井戸水を100%使用しているので、肌触りや体を温める効果がかなり違います」とアベさんは言う。

夏の時期は14℃の井戸水を生かして水風呂も実施、こちらも大好評とのこと。また地域性や季節感に合わせて実施されている「変わり湯」もユニーク。例えばコーヒー風呂は市内の「かめのや」さんとのコラボで始めた企画、一般家庭でも楽しめる入浴剤も販売しています。

「さまざまな業種や企業とコラボすることで話題性も生まれ、地域が盛り上がるきっかけになると思います。そうすればお客さんにリーチしやすくなる。銭湯は僕にとって“核”になるもの。もちろん仕事でもありますが、銭湯をやっているアベノリミツとして、いろんな出会いが広がっていきますから」

またTシャツやアクセサリを始め、カジュアルなグッズも充実しています。「学生時代からグッズやロゴをつくるのが好き」ということから、これらも富士の湯への導線の一つになっています。当初は60歳以上のお客さんがメインでしたが、今では10代、20代の同世代のお客さんも増えているそうです。

富士の湯
松本市本庄2丁目9-8
【営業時間】15:00～21:00、火・木・日曜休



屋根の家紋からデザインを取ったTシャツ

桑の湯



5000冊の漫画を背景に笑顔の山田さん

かつては19カ所も銭湯があった塩尻市でしたが、今では唯一、昨年12月末にリニューアルオープンした桑の湯がコミュニティの火を灯しています。東京、大阪、神戸で銭湯経営をするニコニコ温泉が、「桑の湯廃業？」のうわさを聞きつけ、初めての地方出店となったわけです。

白羽の矢が立ったのは同社でバイト経験のある山田花さん。始めは断るつもりでしたが「母屋も庭もあるから、いろいろ面白いことができそう。イベン

トを考えることが好きなので、いろんなコンテンツをつくって塩尻の方と深くつながりたいなあ」と3月に東京から引っ越してきました。

地元採用スタッフとはすぐにうち溶けて、スタッフの妹さんが窓にイラストを描く企画を始めたところ、お客さんにも大好評。取材日はイラストを描き換える作業を見守っていました。



地元スタッフとイラストを描く

菊の湯

「湯屋チーフ」の鮎沢日菜子さんは、幼い頃から、一人暮らしのお祖母さんから、自宅から離れた温泉街や、好きなお風呂で知り合った友達と楽しく過ごす話を聞かされていました。人と人をつなぐ銭湯の魅力に引かれ、銭湯で働くことを夢見てきました。そこに大好きなブックカフェ「栞日」が銭湯を運営すると聞き、居ても立ってもいられなかったそう。しかし、当時は愛知県の福祉NPOで就職していたから断念。Uターンを機にアルバイトとして、菊の湯で働き始めました。



英語のパンフを持つ鮎沢さん

あがたの森通りの中ほどに位置する「菊の湯」は、リニューアルしてから今秋で5年目を迎えます。現在の

番外編 信州大学 銭湯サークル



信州大学銭湯サークルは先輩によれば、富士の湯で掃除のボランティアに頻繁に通っていたメンバーでサークルを立ち上げたそうです。僕は4代目の代表です。月曜は富士の湯さん、火曜はみのるの湯さんでお掃除のボランティアをし、その後入浴させていただいています。メンバーはグループLINEに入っている65名。銭湯さんの受け入れ可能な4、5人をピックアップして出かけて行きます。メンバーはお風呂が好きという人もいれば、一人暮らしで週1回は湯船につかりたいという学生も多いです。留学生が活動に参加してくれたこともあります。そうそう、昨年は東京外国語大学の銭湯サークルの皆さんが松本に来てくださって、一緒に入浴しました。

僕らは松本の銭湯文化の存続と、それを若者に広めていきたいという思いを持って活動しています。将来の銭湯がどうなるかは、非常に関心があります。ぜひ、僕らと一緒に銭湯文化を守るために活動しましょう。

信州大学銭湯サークル代表 工藤和基さん

浴場を利用した上映の様子



桑の湯
塩尻市大門一番町15-17
【営業時間】5:00～25:00 (13:00～15:00)、火曜休

銭湯で始まる 新しいコミュニティ

全国的に銭湯が廃業していく傾向が続いています。要因は後継者不足や建物の老朽化、燃料費の高騰などなど。お湯に入って身体をリラックスさせるだけでなく、人と人をつなぐ心の拠り所でもある銭湯が街から消えてしまうのは寂しいことです。でも一方で、若い経営者が、独自の視点、企画、SNSでの発信などを通じて、銭湯の再生に取り組み、利用者を広げている事例が注目を集めています。まだまだ銭湯がたくさん残っている松本市でも個性的な活動を行う銭湯があります。銭湯で始まる新しいコミュニティが出来上がっているのです。



元気な笑顔の管理人の和田さん



ばらの湯

ゆくりと演歌が流れる中を進んでいくと、縁起の良さそうな大きな富士山の絵が目飛び込めます。ここ

が建物の内なのか外なのか、トタンに「ばらの湯」と書かれた看板が不思議さを漂わせています。

こちらは銭湯をリニューアルした高齢者施設。「ゆ」という文字が描かれた手製のユニフォームをいなせに着こなした介護福祉士の和田由佳さんが明るく迎えてくださいます。この施設ができた経緯を語ってくれました。

「介護の仕事を始めて24年。お風呂って、健康にとってすごく重要なんです。利用者さんの皮膚トラブルも早期発見できるから。私は大規模施設に勤め

ていた経験があって、どうしても時間に追われてしまい、入浴も芋洗い状態だねと言われ、お風呂でリラックスしたり、ゆっくり話することができる、入浴に特化したデイサービスをやりたいと前から思っていました。そして、めぐりめぐってここにたどり着いたわけです」

1日定員18人のコンパクトな施設ですが、利用者の皆さん、どこかゆったりしているように感じられます。

銭湯を利用した先進事例を探してみましたが、本格的な高齢者施設は日本で唯一の存在といえるのでは？ できるだけ銭湯時代の風情を残した空間には、椅子や器具も介護用のものはほとんど使われていないそう。よく見れば湯桶はゴミ箱として存在感を発揮！黄色の風呂桶を使った、楽しい「おけ友体操」

も好評です。

そして、もう一つの浴室は広くて、のびのびできるお風呂として使っています。若いスタッフの皆さんにエスコートされた利用者さんたちの晴れ晴れした笑顔が印象的です。

「もっと遊び心がある取り組み、銭湯エンターテインメントができる可能性があると思っています。身体的な変化や精神的なもので不安を抱えている方が多いけれど、支える中で少しでも元気になってくれる姿を見られるのがすごくうれしいのです」(和田さん)

カモミールハウス ばらの湯
松本市鎌ヶ崎2丁目2-18
サービスの内容：食事、入浴、機能訓練、レクリエーション、行事等、健康管理、送迎、生活相談等



銭湯の備品をそのままにした昭和レトロな空間

松本を知り、
広げてつなげる。

監督団がゆく!

第2弾



上土劇場

大正ロマン薫る上土通りにある映画館を改装した劇場。演劇、コンサート、講演会など地域の芸術活動の拠点。劇場の持つ雰囲気から3人それぞれやりたいことが浮かんだようです。



浅間温泉文化センター

ホールに行くとまず音の響きとピアノを見る石丸さん。松本はどこに行ってもちゃんとピアノがあるね、とご満悦。



馬場家住宅

馬場家住宅は、標高約690m、眼下に松本平を見下ろし、北アルプス連峰を遠望できる内田地区にあります。江戸末期に建てられたこの地方を代表する民家建築で、主屋は、長野県西南部の代表的な建築「本棟造(ほんむねづくり)」。今もその屋敷構えは往時の姿をとどめている重要文化財です。木ノ下さんは興味津々。案内してくださった西澤館長を質問攻めにしていました。



美ヶ原高原美術館

長野県の中央、八ヶ岳中信高原国定公園内にあり、北アルプスをはじめとする雄大な山並と高山植物が魅力。日本一美しい高原と称されています。美術館はその地の一角に、1981年6月、箱根・彫刻の森美術館の姉妹館として開館。広大な敷地に現代彫刻が並び野外美術館です。向かう道中はあいにくの雨、しかもかなりの土砂降り。見学は無理かなと思っていたところ、近づくに連れ、雨が止み、青空に。晴れ男石丸さんのおかげ？



田辺薬品 2階 space銀華

昔は100人もの芸者さんがいた浅間温泉。ここはかつてそのお稽古場だったところ。芸苑組合が手放す事になったときに田辺薬品の先代が私財を投じて購入し、それ以来管理をしているのだそうです。イベントスペースとして貸出も可能。当時からある幕などレトロに触れることができました。



松本丸の内美術館

2024年に徳田医院横に開館した私設美術館。所狭しと飾られた圧巻のコレクション。院長先生自らご説明いただきました。松本城が正面に見える2階の素敵なスペースの真っ白な壁に監督団がサインさせていただきました！



池上百竹亭

柳宗悦をはじめ多くの文化人や文人と親交のあった実業家、呉服商・池上喜作（号：百竹亭）氏の邸宅。現在は、生涯学習と文化交流の場として施設の貸出を行っています。庭園は無料公開されていて茶室もあります。松本城北門を出てすぐなので、みなさんも一度訪ねてみてはいかがでしょうか？



来年は、
どこへいきましょうか？





Illustration & Text
otama

太田真紀／イラストレーション、ビジュアルストーリーテリング、またそれらを軸としたデザインなどが得意。デザインファーム・Takramでの勤務を経て、2021年4月よりイラストレーターとして独立。松本に住んでいますが、まだまだ知らないことばかりです。
otama-ki.com



松本のゲート

いつのまにか松本駅の西口が「アルプス口」と呼ばれるようになっていた。一体いつの話をしているのかという感じだが、2007年からのことらしい。天井の高い大きなガラス窓から北アルプスが眺められて、広々とした雰囲気は空港のようだ。

私は駅や空港にいる人を見るのが好きだ。大学生のときに、ターミナル駅で人々が別れる様子を集めたアニメーションを作ったことがある。例えば相手が改札に入って人混みに紛れるところまで見送る人。漠然と遠くを見つめながら誰かを待っている人。小さなやりとり、仕草や表情に勝手ながらドラマを想像してしまう。



自分自身もこれまで何回、松本駅の改札を通過したのだろう。定点カメラになって見てみたい。進学や就職など状況が変化しながら、自分にとって駅の意味も変わっていった。帰省のために使う駅から、どこかへ出かけるための駅へ。家族が迎えにきてくれる駅から、お客さんを送迎する駅へ。大人になってから、駅の改札に誰かがいてくれる時のありがたさと嬉しさがより一層分かるようになった。

部活帰りの高校生、大きなリュックの登山客、海外からの観光客、出張でスーツを着た人、構内の清掃をする人など。皆、改札のゲートをくぐって松本の街へ出ていく。そしてこのゲートから別の場所へ向かう。観光・暮らし・学業・仕事など各々のモードをまとめて、たまたまそのとき松本に居合わせた人たちが作る風景。



〔特集〕

銭湯で始まる新しいコミュニティ

vol.
07
2025
Summer

ねんき

